

『経済価値を超えて——健全な経営行動の提案——』

(同友館・2001年・1,800円)

萩原 富夫

20世紀は、過度な生産に基づく消費社会を生み出した。消費が美德とばかりに、資源を浪費したため自然と人心の荒廃を招いた。この負の牽引車となったのは、経済的合理性のみを追求し、規模の拡大・成長を続けることが「善」だと考えた企業行動であった。その行動は社会の画一性、同質性、単純性、一様性を促し、生活世界の意味喪失状況をも蔓延させたのである。

この経済的合理性が因って立つ思考基盤である還元主義的世界観を相対化するために、「生命有機体論」を理論化に組み入れて、企業行動の「健全性」を捉え直そうとするのが本書の目的である。

有機体論では、個と個、個と全体との相互の対話に創発効果が生まれ、それ故に全体を個々の単なる総和ではなく、意味を持つ全体と捉える。還元しては説明できない個々の協同が複雑に絡み合うそれ自体が固性的存在であるとの認識に立つ。この世界は、異質な存在を許容しながらお互いに働きかけ合って全体を構成するという「相補性の原理」を理解することが大事な点である。

以上の分析枠組みから、本書は、生命有機体を視点に企業行動を診断するため、「健全性の規範概念」として次のような定義を導いた。すなわち、「環境との相互共存を前提とし、長期持続を自主的・主体的に実現することを念頭においた組織の潜在可能性」である。この規範概念の分析基準には、主体軸（主体性）、空間軸（関係性）、

時間軸（持続性）の3点が置かれた。

主体軸には、自己組織化の程度を示す独自性・開放性、空間軸には、環境との調和の程度を示す全体性・連動性、時間軸には、経営理念、風土等の継承を示す浸透性・継続性という測定指標を設けている。以上の基準の実践性の高さは、パイロットテストに実施した診断結果が如実に示している。

この「健全性の規範概念」は、従来の自由競争の中で、企業が生き残りを賭けて追求する経済価値＝営利欲、他を寄せ付けず排斥する企業行動の在り様を生態系に位置づけて捉え直すことの急務を訴えている。

企業が真に経営の継続性・持続性を得るためには、組織の「質」の変化・発展の方向性を見出すことが核心的事項となる。そのためには、企業自らが生命有機体の一員であることを再認識して、生命界の「多様性」を許容するシステム作りに務める。社会や地域との共生や資源の有効利用を考慮した異業種との関係性を図りながら、社会価値全体を継続的に創りあげることが責務であると本書は説く。「生態系の長期安定は、多様性を保持することによって確保される。」の記述はけだし名言である。

6名からなる共著がこれほどまでに「統合化」されている作品を今まで読んだことがない。それぞれの章には、その担当者の個性の香りがあるばかりでなく、新たな概念の創造への禁欲的な立場からの協働が実に清濁しく行間に漂う一冊である。